

「どくさいスイッチ」

京都大学教育学部 3 回生 川下慶和

0. 注意

「何故いきなり注意されねばならんのだ」と思われるかもしれないが、本文に入る前に伝えておかなければならないことがある。それは、本記事はネタバレばかりだということだ。今回私がおすすめする一話はタイトルの通りだが、この話がどれくらい有名なのか私には分からない上に、おすすめポイントが結末に近いことから、話の初めの方だけちょっと書いて、「あとは実際に漫画を読んでもらってください」というわけにはいかない。

ネタバレだけは嫌だ、という方は、一度漫画を読むなり、アニメを観るなりしてから、本記事を読んでいただきたい（本記事は、漫画の方の「どくさいスイッチ」について書いている）。

1. あらすじ

まず、どんな話なのかを軽く説明する。

野球の試合での失敗をジャイアンに責められ、追い掛け回され殴られたのび太は、自分の野球の下手さを棚に上げて、ジャイアンが消えてくれたら、と呟く。そんなのび太にドラえもんがひみつ道具を差し出す。〈どくさいスイッチ〉だ。ボタン一つで嫌な奴を消せる。これでジャイアンを消せばいい。そう言うドラえもんからスイッチを受け取るも、使用を躊躇うのび太。しかし、家を出るとまたジャイアンが追いかけてきて殴ってくる。ついに、のび太はボタンを押してしまう。

ジャイアンは消えた。しかも、のび太以外の人間は記憶からもジャイアンが消えており、誰に聞いてもそんな奴は知らないと言う。とんでもないことをしてしまった。落ち込むのび太の元に、スネ夫がやってくる。ジャイアンがいない世界では、スネ夫が殴りかかってきたのだ。またスイッチを押してしまった。スネ夫も消してしまったのだ。のび太はドラえもんからスイッチを返すことにする。

家に帰るまでにも、何度ものび太はスイッチを押しそうになるのをこらえ、ドラえもんから消した二人を戻すようお願いするも、それは無理だと一蹴される。部屋に戻って寝転ぶも、みんなが自分を馬鹿にしているような気がして、どうしようもなく暴れ回る。「みんなですべてたかっぺのくことを。だれもかれも消えちまえ」

スイッチに手が当たってしまったのだ。本当にのび太以外の人間が皆消えた。一瞬落ち込むも、前を向き、誰にも邪魔をされない世界を楽しもうとするのび太だが、やはり一人では何をしていても虚しい。「一人でなんて…、生きていけないよ…」

「気に入らないからって、次つぎに消していけば、きりのないことになるんだよ。わかっ

た?」「うん、わかった」あまりにも自然に返事をしたのび太。振り向くと、誰もいないはずの世界にドラえもんがいる。どくさいスイッチは、独裁者を懲らしめるためのひみつ道具だったのだ。無事、ドラえもんが元に戻ってくれて、日常が帰ってきたのだった。

2. おすすめポイント

私のおすすめポイントは、「気に入らないからって、次つぎに消していけば、きりのないことになるんだよ。わかった?」と言ったときのドラえもんの笑顔だ。あまりにも優しすぎる。この話の中のドラえもんは、他の話と比べても、結構怖い。どくさいスイッチを渡すときの嫌な笑い方。消した人間は元に戻せないと伝えるときの真顔。そして、のび太がスイッチを返したがっているのに受け取らないという狂気。そもそも、どくさいスイッチを渡そうという発想が、怖い。その怖さが余計に、最後のドラえもんの笑顔を優しいものになっている気がするのだ。

生きてると、嫌なこともあるだろう。皆さん、そんな時は、この話の最後、ドラえもんの笑顔に、その優しさに癒されてほしい。

参考文献

藤子・F・不二雄『ドラえもん』てんとう虫コミックス 15 巻「どくさいスイッチ」